

バーナード・ウィリアムズの功利主義批判再考

## Bernard Williams' Critique of Utilitarianism Reconsidered

渡辺一樹

### Abstract

This research discusses Bernard Williams' critique of utilitarianism. I will address Williams' well-known “Integrity Objection” and clarify where his main issue with utilitarianism lies. Through this, I will demonstrate that the separation of the two viewpoints – the “inside viewpoint” and the “impartial viewpoint” - is the issue, as the utilitarian impartial viewpoint does not capture the value of ethical deliberations based on our inside viewpoint in which we presuppose our personal projects. Furthermore, I will argue that this interpretation enables us to place the objection in the context of the critique of impartiality which is one of the central themes of Williams' ethics.

### (1) 研究テーマ

本研究の対象となるのは、英国の道徳哲学者バーナード・ウィリアムズ (Bernard Williams) による功利主義批判である。主なテキストは、Smart & Williams [1973]. *Utilitarianism: For and Against*. (UFA) におけるウィリアムズの功利主義批判である。とはいえ本研究は、ウィリアムズが功利主義を論じる他のテキスト (e.g. ‘The point of view of the universe: Sidgwick and the ambitions of ethics’) も積極的に扱う。

本研究は、ウィリアムズの功利主義批判を分析することを主要な目的とする。彼の議論については、論者たちの誤解も多く、未だその解釈が問題になっている。本研究は、説得的な解釈の提示を目指し、それによってウィリアムズが功利主義に見出した問題を明らかにする。本研究の解釈はまた、彼の功利主義批判をより大きな文脈（不偏性批判）で捉えることを可能にする。

### (2) 研究の背景・先行研究

研究の背景として、まず、ウィリアムズの UFA での議論を紹介する。彼の功利主義批判は、印象的な二つの例とともに示される (UFA:97-99)。

科学者ジョージ：失職中の化学者ジョージは飢えた家族を抱えている。

彼は生物兵器開発への反対を信条としてきた。しかし、飢えを心配した旧知の学者から生物兵器開発プロジェクトに誘われた。参加すれば給与で家族を養える。参加しなければ、彼の代わりに、より熱心に開発を行う候補者がいることをジョージは知っている。家族も参加を望んでいる。

**探検者ジム：**ジムは植物調査で外国を旅行中に現地の自警団に逮捕された。彼の隣には、20人の住民が手錠で繋がれている。彼らは政府に反抗的な地域の住民から無作為に選ばれた人びとであり、見せしめとして処刑される。だが、指揮官は、ジムに「外国からの客人」としての名誉を与えたいと申し出る。すなわち、ジムに住民一人を処刑する機会を与えて、特別な名誉のしるしに、他の住民は解放される。断れば通常通りの処刑がされる。住民たちも、ジムに申し出を受けてくれと懇願している。

関係者の功利を計算するかぎり、二つの事例における行為功利主義の答えは明らかである (UFA:99)。すなわち、ジョージは仕事を受けるべきだし、ジムは一人を殺すべきである。ウィリアムズはしかし、この功利主義の単純な思考に疑義を呈す。ジョージの方は、そもそも、研究に参加すべきではないかもしれない。ジムの例でも、たとえ功利主義の答えが結果的に正しいとしても、答えは功利主義が考える仕方で単純に出されるものなのか疑わしい。

ウィリアムズが診断するところ、ここでの功利主義の問題は、その消極的責任 (negative responsibility) に由来する (UFA:94-6)。すなわち、功利主義は、ある行為者がなすべき行為を考える際に、彼がφする場合の帰結と同等に、φしない場合の帰結も重視する。ジョージであれば、彼が研究に参加しない場合、もっと熱心な同僚が研究に参加するという帰結を重視する。このような消極的責任を重視する思考によって、「ジョージは(参加しないともっと酷いことが起こるのだから)参加するべきだ」という結論が出る。しかし、このように考えるとき、行為者(ジョージ)は、周囲の関係者の功利の調整者に過ぎなくなってしまう (UFA:116)。このように調整者的な思考を強制することは、しかし、個人のプロジェクトの重要性を抜け落ちさせてしまうことがある。例えば、ジョージに対してそのように調整者的な思考を強制することは、彼が有するはずの「生物兵器研究反対のプロジェクト」の重要性を抜け落ちさせている。このような事態を、ウィリアムズは、「行為者のインテグリティへの攻撃」とか「(行為者の)リアルな疎外」と呼ぶ (UFA:116-7)。このように、ウィリアムズの功利主義批判は、功利主義的思考に対して、それが行為者のインテグリティを失わせるという批判である。かくして、そ

れは、「インテグリティからの反論 (Integrity Objection)」と呼ばれる。

かかるウィリアムズの功利主義批判については、その論争性ゆえに、主に以下の二つの方向で研究されてきた。まずは、ウィリアムズの功利主義批判に反論する（主に功利主義者からの）批判的研究であり、いまひとつは、そうした反論に対してウィリアムズの批判を擁護しようとする研究である。

まず、前者の批判的研究を取り上げる。それは、主に功利主義者からの、ウィリアムズの「インテグリティからの反論」への直接的な応答として提起されており、典型的には三つの論点に関わる。第一に、「インテグリティ」への依拠がエゴイズムだとするものがある。行為者のインテグリティ・プロジェクトのような個人的なものによって功利主義的決定を批判するのは利己主義的だと反論される (Brink [1986] pp.436-7, cf. Harris [1974] p.273)。第二に、「消極的責任」を問題とするウィリアムズの混乱を指摘するものがある。ウィリアムズは、功利主義において、自分がゆしないことによる帰結を重視する「消極的責任」を問題視しているが、これは自然な倫理的思考であると反論される (Harris [1974], Davis[1980])。第三に、間接功利主義からの反論がある。それによれば、功利主義的計算は、ウィリアムズが想定するように個人の熟慮にいちいち現れる必要がない (Brink[1986], Railton[1984], 成田[1994])。だから、功利主義計算が個人のインテグリティを抑圧するというのは間接功利主義には当たらないのである。このように、ウィリアムズの議論は、主に功利主義者たちから批判的に検討されてきた。

これに対して、ウィリアムズを擁護しようとする研究もある。その一つの例である都築 [2008] は、まず、反論者たちによるウィリアムズの議論の誤解を指摘する (都築 [2008] pp.106-8)。ウィリアムズ自身が強調するように、「インテグリティからの反論」は、個人のインテグリティが絶対的な価値だと主張しない (WME:212-3)。また、消極的責任それ自体が焦点になっているわけでもない (都築 [2008] pp.107-8)。個人のインテグリティを不可侵とするエゴイズムでもなければ、消極的責任を問題とする混乱した議論でもないのである。

そのうえで、ウィリアムズを擁護する研究は、「インテグリティからの反論」が提起する論点を積極的に解釈しようとする。ひとつの解釈として有力なのは、ウィリアムズの議論は「行為者性 (agency)」の理解を問題にしているというものである (Queloz [2020] pp.19-20)。すなわち、行為者性の概念は個人のプロジェクトを必然的に伴うのだが、功利主義は個人のプロジェクトを捨象することで、行為者性を（哲学的に）うまく理解できていない、というのがウィリアムズの指摘した問題であると解釈される。本稿では、これを

「行為論的解釈」と呼ぶ。

先行研究の状況をまとめる。ウィリアムズの功利主義批判は、その論争性ゆえに、反論と擁護というかたちで主に検討されてきた。とはいえ、このような論争において、反論者の誤解が指摘されることも多く、また、擁護者もウィリアムズの議論の解釈を目指してきた。よって、先行研究においては、**ウィリアムズの議論の解釈とその評価**が焦点となってきたと整理できる。

### (3) 筆者の主張

このように、ウィリアムズの議論の解釈が問題となっている研究状況を踏まえ、本研究も、ウィリアムズの議論の解釈とその評価を目指す。その際、はじめに指摘した通り、「インテグリティからの反論」をより大きな文脈（不偏性批判）に接続可能なかたちで解釈することを目指す。これによって、ウィリアムズの多様な功利主義批判が統一的に整理される。

さて本研究の解釈とは、ウィリアムズの功利主義批判を、「**内的視点 (inside viewpoint)**」と「**不偏的視点 (impartial viewpoint)**」の対立として読解するものである<sup>ii</sup>。前者は、ウィリアムズの主著である *Ethics and the Limits of Philosophy* で明示された概念であり、「自らの性向からみる視点」である (ELP:57)。すなわち、自らのプロジェクトやコミットメントの内側から物事をみる視点であり、そこからは多様なものが価値を帯びて現れてくる (ELP:58)。例えば、ジョージの内的視点からは化学兵器は負の価値を帯びて現れるだろう。このような内的視点に対して、「不偏的視点」とはそのような内的視点を超越した（古典的功利主義者シジウィックの言葉を借りれば）「宇宙の視点 (the point of view of the universe)」である (MSH:169)。それは、誰かの内側の視点ではなく、あたかも「永遠の相のもとに (sub specie aeternitatis)」外側から不偏的に物事をみる視点である (ELP:123)。

世界に現れる功利のみを平等に扱う功利主義は、このような「宇宙の視点」にコミットしている。その上で功利主義は、そのような宇宙の視点からなすべき行為を決定しようとする。例えばジョージのケースでは、宇宙の視点から関係者の功利を平等に計算したうえでジョージは兵器研究に参加すべきだと考える。このような視点に対して、本研究が解釈するウィリアムズは、内的視点を前提にした価値を説いている。ウィリアムズによれば、ジョージの内的視点から世界を眺めるとき、彼は兵器研究に参加すべきではないかもしれないし、我々は彼が参加しないことに現れる彼のインテグリティの**価値**を理解できるのである。すなわち、ジョージが自らの信念に忠実に行うことに現れる価値を理解できる。以上のように、本研究は、「内的視点と不偏的

視点の隔絶」という問題設定のうえで、インテグリティは「行為者の内的視点を前提して意味をなす価値」であり、「不偏的視点」にコミットした功利主義はこの価値を理解・説明できないという議論として、「インテグリティからの反論」を解釈する。この読解は、とりわけ、ウィリアムズが自らの功利主義批判を回顧した重要なテキストにおいて直截に支持される (WME:212-3)。

「視点の隔絶」解釈は、先行研究を発展させながら、批判に応答するものであり、ウィリアムズ倫理学を統一的に理解することを可能にするという三つの**特徴**を持つ。つまり第一に、本研究の解釈は、従来の「行為論的解釈」と微妙に異なる。行為者性を問題にする解釈においては、功利主義によってジョージが行為者として自らのプロジェクトから行為できないことが問題になっていたが、本研究は、ジョージの行為者性の哲学的理解より、ジョージが自らのプロジェクトから行為することに存するはずの価値を問題にする。つまり、ジョージが行為者としてのインテグリティを示すときに現れる（功利主義が理解できない）価値にウィリアムズは目を向けていると考える。また、行為論的解釈に含意されうる「功利主義に従うとき行為者として行為できない」という主張 (Queloz [2020] p.20) に、本研究はくみさない。功利主義的・調整者の行いをするときも我々は行為者であろう。

本研究は、第二に、批判的研究にうまく応答する。この解釈でも、消極的責任概念それ自体が問題ではなく、功利主義の消極的責任においてコミットする「不偏的視点」とそれによる内的視点の価値の疎外が問題になる。あるいは、功利主義の「不偏的視点」がインテグリティの価値をそもそも理解できないことが問題であって、インテグリティが「絶対的な価値である」・「調整者の行いの価値を常に凌駕する」といった主張にコミットしない。

本研究は、第三に、ウィリアムズの他の議論と接続しやすい。まず、不偏的視点と内的視点の隔絶は、彼の間接功利主義批判においても共通する。間接功利主義者のヘアは、自らの性向から熟慮しながら（直観的レベル）、そうした性向を適宜功利主義的に反省する（批判的レベル）という二層理論を主張したが、ウィリアムズはこれに対して、我々の性向はそこから特有の世界観・価値（内的視点）を構成する以上、体系的に功利主義的反省（不偏的視点）に従う保証はないという批判を行った (ML:52-3,MSH:167)。これは、やはり、我々の内的視点と不偏的視点との関係を問題にしていると整理できる。また、二視点の隔絶は、「ひとつ余計な思考 (one thought too many)」の議論にも現れている。そこでは、不偏的視点にコミットした倫理学理論（功利主義・カント主義）は行為の正当化において、「ひとつ余計な思考」を経由してしまうと論じられる (ML:18)。例えば、溺れているふたりのうち自分の妻を

「彼女だから」助けることは、それ自体正当化されるが、このような直接的な正当化を倫理学理論は理解・説明できない。倫理学理論は、不偏的な視点にコミットしているために、不偏的な正当化（e.g.「誰しものが自分の妻を助けることは功利を最大化する」）を経由せざるを得ないからである。ここでもやはり、内的な正当化と不偏的な正当化の隔絶というかたちで、二視点の隔絶が問題になっている。

このように、本研究が提示する「視点の隔絶」解釈は、新たな仕方で批判的研究に応答しつつ、「インテグリティからの反論」を、（功利主義や倫理学理論の）「不偏性」を問題にする彼の多様な議論と接続することができる。

#### (4) 今後の展望

本研究の解釈を認めたとして、つまり、内的な視点と不偏的視点の隔絶が問題となっているとして、功利主義（倫理学理論）からは二つの批判が投げかけられるだろう。ひとつは、二視点の隔絶を当然のものとして認めたいうえで、不偏的視点こそが内的視点を指導すべきであるという批判である（Brink [1986] p.432）。本研究ではこの立場を、「不偏的視点の優位」と呼ぶ。いまひとつは、不偏的視点は我々の倫理的思考において重要なものであり、それを否定するのは受け入れがたいというものである（Nagel [1986] p.198）。

ふたつとも有力な批判であるが、ウィリアムズはどちらにも応答できる。第一の批判については、まず、「内的視点の優位」という論点によって応答することができる。倫理的な価値は、根底的には内的な視点に基礎づけられる。例えば、多くの功利主義ですら、内的な視点に現れる功利・快・選好充足といったものに基礎を置く。結局のところ、「不偏的なシステムへの信奉」も含めて、何か倫理的な意味を持つためには、内的な視点から意味を持つ必要がある、不偏的なシステムそれ自体が内的視点を離れて最高の重要性を持つことはできない（ML:18）。内的な視点こそが不偏的な視点に意味を与えれば、不偏的視点それ自体が内的視点そのものを指導するという批判は成り立たないだろう。かくして、功利主義が純粹な不偏的視点から内的視点を指導する倫理学理論であるとするならば、それは意味をなさないことになる。

第二の批判は、そこまでの「不偏的視点の優位」を含意していない。それは、我々の内的視点からみても不偏的視点は有意義であると主張できる。自分のプロジェクトをいったん離れて、不偏的に思考してみる。こういったことは倫理的に（内的な視点からも）重要なはずである。だとすれば、内的な視点への不偏的視点の導入を行う功利主義は、倫理的にまっとうであり、問題を抱えていないはずである、と第二の批判者は主張するだろう。

かかる第二の批判に対しては、ウィリアムズは功利主義の不偏性の特異性を指摘することで応答しうる。すなわち、功利主義が要請する不偏的視点はきわめて強いものであり、日常的な不偏性を超えてしまっている。というのも、倫理的に重要な不偏性とは、自らの偏りをただすこと・他者へと向かう欲求（e.g.何かをしてあげたい）など、自らの内的視点の範囲・対象を拡張する「拡張的視点」であるのに対して、功利主義が要請する不偏性は宇宙の視点から一切の価値を決定する「絶対的視点」だからである。究極のところ個人はかかる宇宙の視点に立てず、そのような強い不偏的視点に立つことを要求する功利主義理論は、個人道徳としては意味をなさないように思われる<sup>iii</sup>。

以上のように、ウィリアムズは予想される強力な批判に応答することができると思う。とはいえ、本研究は、以下の二つの課題をいまだ抱えている。第一に、本研究と似た解釈を前提に提起されてきた、**間接功利主義からの反論**に丁寧に答える必要がある。つまり、日常的には内的視点に現れる価値から行為しながら、人生全体としては功利主義的反省に従うべきとする間接功利主義の挑戦を真剣に扱う必要がある。そのためには、ウィリアムズの間接功利主義批判や内的視点と不偏的視点の区別をより精緻に追う必要がある。本研究は、第二に、内的視点の内部で、あるいは各人の内的視点どうしで生じる「**価値の衝突の問題**」について論じる必要がある。というのも、本研究はそのような価値の衝突を「不偏的視点」から絶対的に解決するという理路を拒絶しているからである。この問題に対して、ウィリアムズは以下のように応答しうると筆者は展望している。「価値の衝突」については、絶対的な価値（e.g.外的理由）を導入しても解決されることはなく（WME:216）、内的視点どうしをすり合わせるしかない、そして、そのような内的視点（e.g. 内的熟慮）のすり合わせこそが倫理であると（ELP:205-8）。

---

i ジムの事例は「緊急性」という点で複雑である（UFA:118）。根拠のある決定を熟慮する前にすぐに決断すべきだからである。ウィリアムズも、インテグリティの価値について語る際はジョージの事例に集中しており（WME:212-3）、本稿もさしあたりその方針に従う。

ii 先行研究において、本稿と同様に内的視点に注目する解釈として佐藤 [2015] があるが、功利主義視点を外的視点と同一視する点やインテグリティの「価値」を問題にしない点で（佐藤 [2015] pp.93-4）、本研究の立場と異なる。

iii 倫理的に理解可能で、我々の倫理実践に寄与する「拡張的な功利主義」がありうる。それは例えば、個人的な利害を離れて「普遍的な慈愛（universal benevolence）」に立つことを各人に推奨する立場かもしれない。しかしこの「拡

---

張的な功利主義」は、宇宙の視点に立つ功利主義ではない。後者は一切の価値を、我々の内的な視点と隔絶された宇宙の視点から導出するからである。

(5) 参考文献

- UFA** Williams, B. [1973]. 'A Critique of Utilitarianism' in Smart, J. J. C. & Williams, B. *Utilitarianism: For and Against*. Cambridge U. P. pp.75-150.
- ML** ———, [1982]. *Moral Luck: Philosophical Papers 1973-1980*, Cambridge U.P. [ウィリアムズ, B. (伊勢田哲治監訳) [2019]『道徳的な運哲学論集一九七三～一九八〇』勁草書房]
- ELP** ———, [1985/2011]. *Ethics and the Limits of Philosophy*, Routledge Classics, Routledge. [ウィリアムズ, B. (森脇・下川訳) [1993]『生き方について哲学は何が言えるか』産業図書]
- MSH** ———, [1995]. *Making Sense of Humanity: And Other Philosophical Papers 1982-1993*, Cambridge U.P.
- WME** ———, [1995]. 'Replies' in *World, Mind, and Ethics: Essays on the ethical philosophy of Bernard Williams*, J. E. J. Altham and Ross Harrison (eds.), Cambridge U. P., pp.185-224.
- Brink, D. [1986]. 'Utilitarian Morality and the Personal Point of View' in *The Journal of Philosophy*, Vol.83, No.8 (Aug., 1986), pp.417-438.
- Davis, N. [1980]. 'Utilitarianism and Responsibility' in *Ratio* 22 pp.15-35.
- Harris, J. [1974]. 'Williams on negative responsibility and integrity' in *Philosophical Quarterly* 24 (96): pp.265-273.
- Nagel, T. [1986]. *The View From Nowhere*. Oxford U. P.
- Queloz, M. [2020]. 'A Shelter from Luck: The Morality System Reconstructed.' URL= <<https://philpapers.org/archive/QUEASF.pdf>> (最終閲覧日: 2020年11月20日).
- Railton, P. [1984]. 'Alienation, Consequentialism, and the Demands of Morality' in *Philosophy & Public Affairs* 13 (2): pp.134-171.
- 佐藤岳詩 [2015].「倫理学における内的視点と外的視点:「全一性に基づく反論」と間接功利主義」西日本哲学会編『西日本哲学年報』第23号: pp.91-108.
- 都築貴博 [2008].「ウィリアムズにおける全一性と道徳的行為者性」北海道大学哲学会編『哲学』第44号: pp.101-118.
- 成田和信 [1994].「功利主義倫理学とパーソナル・インテグリティ」三田哲学



---

會編『哲学』第 97 号: pp.41-63.

(東京大学)